

＊ 東京天文台が登場する野尻抱影の「星三百六十五夜 夏」を発見

アーカイブ室新聞第304号に「国立天文台（東京天文台、緯度観測所）が登場する小説などの収集」（2010年3月31日）という記事で、第1弾として「土星を見るひと」椎名誠著（新潮社）について書いた。そして第2弾として「波の塔」松本清張著（文春文庫）をアーカイブ室新聞第342号（2010年6月1日）に「国立天文台（東京天文台）が登場する小説：「波の塔」」として記事を書いた。これはアーカイブ室が天文学に関する歴史的に貴重な観測装置、測定装置、写真乾板、映像記録、その他あらゆる資料の収蔵を進めていたところ、観山正見国立天文台長からアーカイブ室長に「国立天文台（東京天文台、緯度観測所）が登場する文学作品（小説など）を収集しろ」という話があり、アクションを起こしていたのである。最近、天文書を数多く書かれている野尻抱影氏の1978年に出た中公文庫『星三百六十五夜』（下巻）に天文台を見学した際の記述があると知らせてくれる方があった。そこで『星三百六十五夜』を入手しようとしたところ、この中公文庫は新たに『春』『夏』『秋』『冬』の4冊に分けて復刊されていた。この4冊を購入したが、関係の記事は「夏（写真1）」の8月23日の項に載っていた。



写真1 『星三百六十五夜』夏

野尻抱影氏は、天文書を数多く書かれた人で天文ファンの裾野を広げ「星の抱影」と称されたとある。小説家の大仏次郎の実兄であり、冥王星の命名者でもある。「天文台日記」を著した元東京天文台の石田五郎氏にも大きな影響を与えたと石田氏本人から聞いたことがある。この8月23日の項はさほど長くはない、そして当時の天文台の様子がよく描写されているので全文を引用させていただく。

以下引用：

天文台 8月23日

夏の天文講座が終わった日、会員にまざって三鷹の天文台の見学に出かけた。

大牧場のように広くて、案内される諸施設のあいだも草原がつづき、時には武蔵野の名ごりの雑木林をくぐったりする。夏草のいきた香、足もとにはねるキチキチバッタも、私の心を少年のようにはずませる。

シュミット・カメラは、じかに炎天の下でまっ白にまぶしく光っていた。太くずんぐりして動くところが昔の臼砲を連想させた。

夏草やシュミット・カメラ在るところ

親切な説明にあたられた T 君は、無造作な仕事着にわらぞうりをつっかけている。若い学者というより、砲手の一等兵か何かみたいで、古なじみの私を微笑させたが、きびきび活動している印象が快かった。

電波反射鏡が野づらに高く、直径十メートルの巨大な皿を太陽へ向けて、じりじり回転していた。黒い雲が西の地平からもくもくひろがって雷鳴が聞こえている。ひと夕立くるらしい。

遠雷や電波反射鏡かげり来る

近くは広い芋畑で、農夫が働いている景色が、天文台を親しみあるものとした。

電波研究室の前に、広い浅い金魚池があり、赤い色がちらちら動いているのも、ここでは珍しく思われた。二、三段上がるとすぐ室で、若い技官が、太陽と、白鳥座 A 星からの電波を印したテープを見せて下さった。その波線の赤い色が、今しがた見た金魚のいろと結びついた。

大望遠鏡のドームは、年月と共に古びて、石段にも草がのびていた。戦争のあいだ長く使わずにいたため、雀が巣くって円屋根が回転しなくなり、T 君たちが離れわざをやって、巣を除去したという話だった。望遠鏡ももう老齡だが、さすがに堂々たるものと見上げられた。

涼しとて二十六インチの下に群る

果して大夕立となったので、H 部長の室に入って、T 君はじめ若い人たちから天文談を聞いたり、N 博士の室で太陽コロナの通信図を見せていただいた。台員に若い女性を見かけたのも、新しい時代だと思った。

夕立前神代寺団子とどいたり

引用終わり

この文章に出てくる、わらぞうりをつっかけたT君は富田弘一郎氏、H部長は広瀬秀雄氏、N博士は野附誠夫氏であろう。野尻抱影氏が見学に訪れた頃の描写がその時代の様子をよくあらわしていて興味深い。10m パラボラ太陽電波望遠鏡があり、電波の観測室の前に池があり、金魚が泳いでいた。その池のほとりに「ノイズの桜」と言われた枝垂れ桜があり、今は台長室の西の広場で余生を送っている。広大な天文台の中では農夫が農作業をしている、キチキチバッタが足元にいたり、筆者にも懐かしい光景である。

野尻氏は、1885 年生まれ、1977 年没である。天文台に来られたのはおいくつの時であったろうか、おそらく 1977 年には 10m パラボラ太陽電波望遠鏡はすでになかった。10m パラボラアンテナがそびえるスケッチ(写真 2)が残っている。

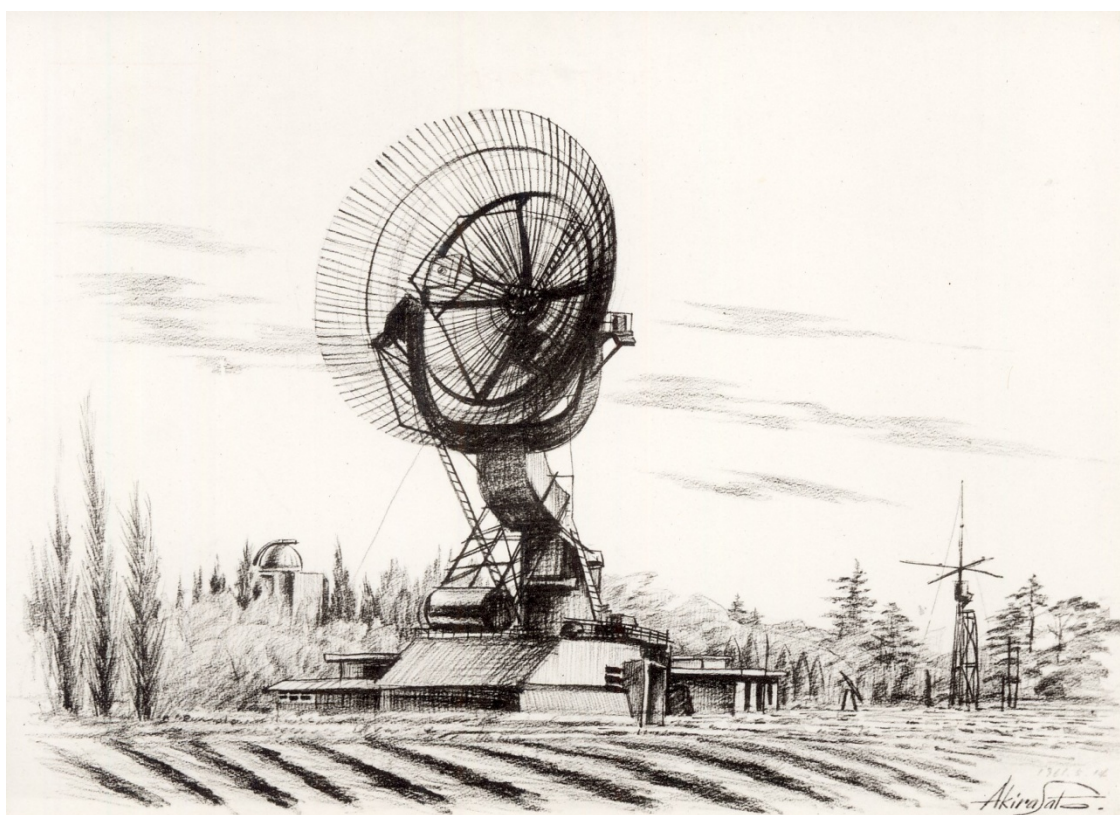


写真 2 遠くにタワー（塔望遠鏡）を見る 10m パラボラ電波望遠鏡